女性雑誌『ナチ女性展望』が伝える日本像

桑　原　ヒサ子

はじめに

敬和学園大学「戦争とジェンダー表象研究会」は、2009年度～2010年度に「第二次世界大戦下の大衆メディアにおけるジェンダー・民族表象の国際比較」というテーマで日本学術振興会から科学研究費補助金を受けた。そして、その成果を広く一般に公開する目的で、2011年3月19日にシンポジウム「第二次世界大戦とニッポン ―表象・ジェンダー・エスニシティ―」(1)を新潟市内で開催した。このシンポジウムは2部構成で、第1部の「第二次世界大戦下、世界のメディアが見たニッポン ―アメリカ・イギリス・中国・ドイツ―」で、私は「ドイツのメディアが見たニッポン」を紹介した。

分析対象としたのは女性雑誌『ナチ女性展望』*NS Frauen Warte* である。アメリカは『ライフ』、イギリスは『ピクチャー・ポスト』、そして中国は『良友』がそれぞれ対象であったので、ドイツの場合は、2つの点でほかの発表とは性質が異なっていた。第一に、ドイツが日本の同盟国であったことで、日本の敵国であった他の3国とは異なる日本像が予想できた。第二に、3国のメディアが一般グラビア雑誌だったのに対し、『ナチ女性展望』が女性雑誌だったことである。それも、当時発行部数第1位(2)の「官製」女性雑誌であった。

日本は、ドイツの同盟国といえども、イタリアとは違って、おいそれとは出かけられない極東の国である。『ナチ女性展望』の日本についての記事を見ると、全く異なる文化圏にある見たこともない国にエキゾチックな関心を示しつつ、同盟国の女性たちを好意的に伝え、理解しようとする姿勢が伝わってくる。しかし、その一方で、戦時下に掲載された日本人女性に関するいくつかの記事は、『ナチ女性展望』の読者層である中産階級の女性たちを啓蒙する目的で利用されたことが良く分かる。日本人女性を遠くにある友として、良きライバルとして意識することで、ドイツ人女性の銃後の守りを堅固にすることが意図されているのである。

ここでは、まず分析対象とする『ナチ女性展望』について簡単に紹介し、次に、雑誌に掲載された日本についての記事を具体的に見ていく。その際、戦前にも日本人女性についての特集記事があり、それが『ナチ女性展望』による最初の日本像となるため、この記事は取り上げてみたい。その後に、第二次世界大戦下の記事について考察を進める。

1.『ナチ女性展望』とナチ女性団・ドイツ女性事業団

ナチ党は1919年の結成以来、男の結社を自認し、女性党員は党指導部から排除されていたため、女性党員の活動は女性たちに任されていた。初期のナチ女性たちは、少人数の組織を作り、男性のために小旗や腕章を縫ったり、壁に非合法のポスターを貼ったり、身寄りのない失業中の突撃隊員の世話をし、街頭で寄付を集めた。彼女たちの裁縫の集まりは、次第に『我が闘争』や党のパンフレットを読み、討論する集会となり、地方でも全国レベルでも数多くの女性指導者が登場するようになった。ナチ党が女性を無視したことが、かえって女性の自立を助長する結果となった。

数多くの女性組織のまちまちの主義主張と活動は、やがて組織間の対立となり、混乱を招くようになった。1931年、党指導部はこうした状況の中で、すべてのナチ女性組織を解散させ、ナチ党の正式な女性組織として「ナチ女性団」へ合流させて統合した。『ナチ女性展望』(初年度1号、1932年7月1日～第13年度4号、1944/45年)[3]は、その翌年の1932年7月にナチ女性団の機関誌として創刊された。女性団成立初期には指導者ポストを巡る権力争い[4]があったが、1934年2月にゲルトルート・ショルツ＝クリンクGertrud Scholtz＝Klinkがナチ女性団指導者となり、これに合わせるかのように、第2年度13号(1934年1月1日）から『ナチ女性展望』は「党公認の唯一の女性雑誌」と位置づけられる。同年11月にはヒトラーから全国女性指導者 Reichsfrauenführerin の肩書きを許されたショルツ＝クリンクは、以後、敗戦までナチ女性団のみならず、すべての女性組織を統括することになる。

全国女性指導者ショルツ＝クリンクの指揮下には、女性だけで構成される全国女性指導部という巨大組織があった。[5]その全国女性指導部の中の「新聞・雑誌・プロパガンダ部門」が『ナチ女性展望』を発行した。この部門は、その他にも何種類かの女性雑誌を刊行し、女性問題をテーマとする自主製作映画を作って上映会を催したり、展覧会を開催していた。中でも最多の発行部数を誇る『ナチ女性展望』は、1933年10月にナチ化を受け入れた非ナチ女性組織を統合してドイツ女性事業団が誕生すると、非ナチ女性組織をナチ体制に組み入れる有効な手段の一つに位置づけられた。

2. 日本に関する記事の分布と「ベルリン・オリンピック特集」の中の日本人女性

(1) 記事の分布

『ナチ女性展望』に掲載された日本についての記事を見てみよう。

戦前の記事は、第5年度5号（1936年8月）に登場している。この号は「世界の女性たち」と題して、各国の女性を紹介するベルリン・オリンピック特集だった。日本、イタリア、イギリス、フランスのほか、中国とトルコの女性の記事が掲載されている。その中で

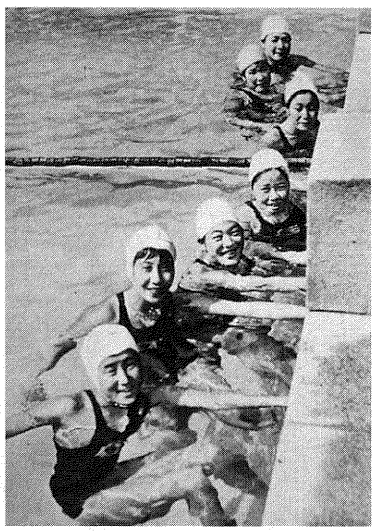
も、日本の記事「極東アジアの女性たち　日本女性」はトップに置かれ、3頁という最大の紙幅が割り当てられている。11月25日には日独防共協定が締結されることになっており、緊密な政治同盟が念頭にあってのことであろう。

1939年9月1日に第二次世界大戦が勃発し、1940年9月27日に日独伊三国同盟が締結されると、日本に関する記事が再び登場する。

号　数	タイトル	執筆者
第5年度5号（1936年8月）	オリンピック特集「世界の女性たち」 「極東アジアの女性たち　日本人女性」	女性
第10年度1号（1941年7月）	「日本人女性の戦時動員」 「日本の家庭生活」	日本人女性 女性
第10年度17号（1942年4月）	「戦時の日本人女性」	男性
第11年度6号（1942年10月）	「子どものしつけ」	女性
第12年度8号（1944年4月）	「日本の国民劇の改作『忠誠』初演」	男性

(2) オリンピック特集「世界の女性たち」の中の「極東アジアの女性たち　日本人女性」(第5年度5号（1936年8月))

この記事には数多くの写真が添えられており、その掲載方法には、いくつかの興味深い意図を読み取ることができる。第一に、ドイツ人（あるいは欧米人と言ってもいいだろう）がイメージする「日本独特の伝統」文化と、ヨーロッパに倣って「近代化を進める国家」としての日本の二つの側面を同時に伝えようとする姿勢である。図1は1899年に上野公園に建立された西郷隆盛像だが、彼は近代化の黎明期に、西南の役で戦死した最後の「サムライ」指導者として紹介されている。その一方で、ヨーロッパの議会制度を象徴する、1936年11月に竣工予定の国会議事堂の写真（図2）が併載され、近代国家日本を印象づけている。



「競泳プールの日本女性水泳選手」
第5年度4号（1936年8月）[6]

女性たちの写真にも、この両側面が意識されている。日本人女性に対する関心は、欧米人にとってエキゾチックで美しい着物にある。婚礼衣装を着た花嫁の写真がこの記事にも1枚、また戦中の記事にも1枚添えられている。しかし、こうした肖像写真には、先に挙げた両面性を見いだすことはできない。しかし、そ

の一方で、特定のシチュエーションで撮影された女性たちの写真の数々は、上述の両面性と、掲載者の意図を雄弁に語っている。図3では、着物姿の女性たちが、西洋の楽器であるピアノとバイオリンを弾きこなしているし、図4では、着物で正装した大臣夫人たちが、洋室に集って、お茶と洋菓子を楽しんでいる。着物に象徴される伝統文化が生きている一方で、ヨーロッパ文化を受容している国であることが伝えられている。

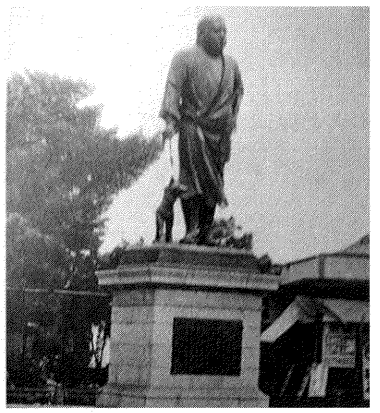


図1「東京、上野公園の西郷隆盛とその愛犬像」

図2「東京の新しい議事堂」

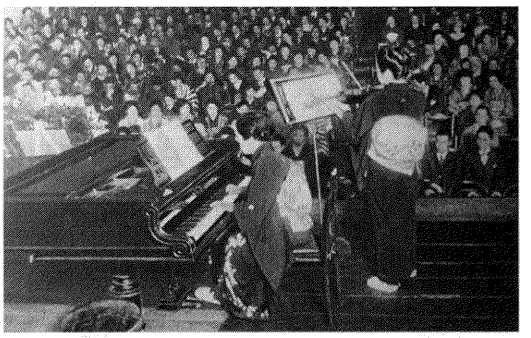


図3「日本人女性によるコンサート」

図4「総理大臣夫人が他の大臣夫人たちをお茶に招待する」

図5「日本にも大きな失業問題がある。若い日本人女性たちが、新国家、満州国に開店する百貨店の求人に殺到」

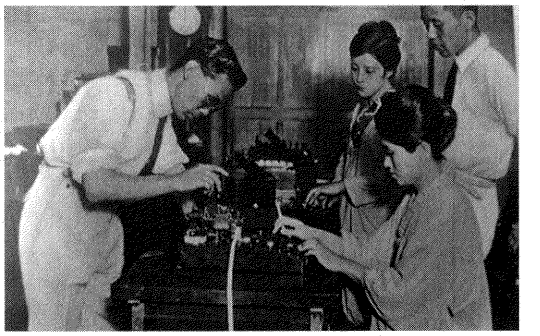


図6「日本人女性もヨーロッパ人女性と同じように職業生活を送っている。新しいテレタイプの練習」

（図1～8、第5年度5号（1936年8月））

第二の意図は、日本とドイツのパラレルな問題を意識させることである。図5と図6では、失業問題と女性の就労がテーマになっている。図5のキャプションには「日本にも失業問題がある」とはっきり記載されている。世界恐慌以来、ドイツも重大な失業者問題に苦しんでいた。ナチ党が権力を掌握する1933年1月には600万人であった失業者数は、各年1月のデータで見てみると、1934年には330万人、1935年290万人と徐々に減少し、1936年は経済的好転の兆しが見え始めてはいたが、未だに250万人が失業中であった。失業問題に苦しんでいるのは、自分たちだけでなく日本も同じ、というドイツ人女性読者への励ましのメッセージが感じられる。補足ながら、図5のキャプションにある満州国については、「日本に支援されて誕生した新国家である」という説明がなされており、友好関係にある国に対する政治的配慮がなされている。

その一方で、同年1936年9月のナチ党大会で、自給自足を目指す「四か年計画」が発表される。失業者の減少と反比例するように、労働力不足が見込まれ、全国女性指導者ショルツ=クリンクは工場や事務所に女性労働力を送り込むよう命令を受けている。[(7)] ナチ・イデオロギーは、女性の居場所を家庭と定め、子どもを産み育てることを女性の使命と位置づけていたが、この時期からイデオロギーと現実は齟齬をきたすようになる。当時の就労女性数は、ナチ党がその「女性解放」を非難したヴァイマル共和国時代より上回り始めていたからである。職業生活を送る日本人女性について伝える図6は、その意味で、家事と出産・育児に加えて就労を引き受けるドイツ人女性たちの不満を和らげ、女性も就労することで民族共同体に奉仕する精神を培う役目を帯びていただろう。

第三に、掲載された写真には当時のジェンダー秩序とその逸脱が読み取れることである。ここで取り上げた写真には、当時のドイツと日本に共通するジェンダー理解が男女別の服装に見て取れる。写真の女性たちは、たとえ西洋的な事柄（すなわち近代化）と関係していても、例外なく着物を着ており、他方、男性は洋服を着用している。図6では明白であるが、図3の男性聴衆も図5で受付をする男性も洋服姿であることに気づくだろう。

着物は日本の「民族衣装」であり、女性が着る着物は、女性が伝統文化の守り手であることを象徴しており、それに対して、男性が着用する洋服は、男性が近代化される社会の担い手であることを象徴している。図6で、女性たちは確かに近代的利器であるテレタイプをマスターしようとしている。しかし、教えるのは「洋服の男性」であり、彼女たちはあくまで「着物」が象徴する自分たちの分をわきまえていなければならない。これは、当時の公的なジェンダー秩序である。この表象方法は『ナチ女性展望』でも同様で、ドイツには全国一律の民族衣装はなかったが、地方ごとの民族衣装を身につけて誌上に登場するのは専ら女性たちである。彼女たちには伝統文化を継承する役割が期待されていた。理想的家族像でも、母と娘は民族衣装を身につけているのに、息子たちは洋服姿で描かれる絵画が多数掲載されている。

しかし、このドイツ人女性記者は、衣服による象徴を同性、つまり女性間にも当てはめることで、建前としてのジェンダー秩序に異議を申し立てようとしているかに見える。記事本文を見てみよう。

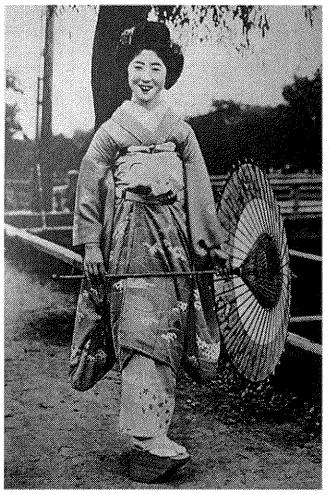
彼女の記述によれば、日本人女性は抑圧され、彼女たちには権利がないと言われるが、それは誤解に基づくものであり、日本では自我を控えることが美徳とされ、儒教の影響から従順に仕えることが理想とされているからであるという。逆の見方をすれば、ヨーロッパにおける日本人女性のイメージは、やはり「抑圧され」、「権利がない」ということになろう。しかし、日本人女性の現実に接し、彼女は果敢にこのイメージを覆そうとする。

日本には「おかみさん」という呼び方があって、これは「お上（＝神）」に由来し、かつて竈を支配し、財布を預かる重要な人物だったと解説する。「かかあ天下」や「入り婿」といった表現が説明され、恐妻家も多いと日本の夫婦関係の一面がユーモラスに紹介される。ヨーロッパでは、日本人女性はか弱く華奢というイメージがあるが、剣道、長刀、弓、柔道といったスポーツをする女性もおり、偏見に満ちた日本の女性像から解放される必要があると主張している。

こうした主張は、ナチ女性に対する敵国の偏見と闘う全国女性指導部の努力に相応していた。ナチ党の女性差別的イデオロギーを根拠に、外国の新聞はドイツ人女性の地位が低く搾取されていると書き立てた。ショルツ＝クリンクは、外国で演説する度に、ナチ女性団・ドイツ女性事業団の活動を伝えて、偏見に反証しつづけ、全国女性指導部の「国境と外国」部門でも、外国からの客を指導部に迎えては、実情を見聞してもらうよう努めた。[8]
図7と図8では、「着物」と「洋服」の日本人女性が並べられている。確かに古い伝統を守る女性もいるが、このドイツ人女性記者は、ヨーロッパで考えられているのとは違って、決して「日本人女性＝芸者」ではなく、建前のジェンダー秩序には収まらない「新しい女性たち」がいること、そして、公的ジェンダー秩序が絶対的ではないことをドイツ人女性読者に伝えようとしているかに見える。

3. 戦時中の日本人女性

第二次世界大戦勃発後の記事には、プロパガンダ的意図が明確に見て取れる。見出しを並べてみると、「日本人女性の戦時動員」、「日本の家庭生活」、「戦時の日本人女性」、「子どものしつけ」、「日本の国民劇改作『忠誠』初演」となっており、演劇関係の記事を除けば、戦時に日本人女性が果たすべき勤めについての記事ばかりである。「戦時の日本人女性」と最後の演劇に関する記事は男性記者によるものだが、残りの記事はすべて女性が執筆しており、その内、「日本人女性の戦時動員」は日本人女性マツノ・シゲコの報告である。マツノの記事から見てみよう。



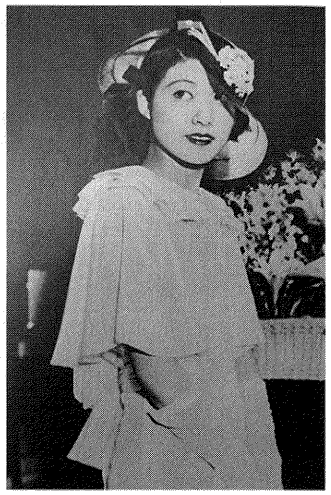


図7（左）
「芸者。ヨーロッパ文化・文明から多くを受容した近代国家、日本にも古き日本は健在である。芸者は高い教養を身につけた女性で、古き日本文化のあらゆる芸術に通じている」

図8（右）
「現代の日本人女性」

「日本人女性の戦時動員」（第10年度1号、1941年7月）が掲載された号には、イタリア人女性の戦時活動記事をイタリア人女性が執筆しており、「女性の戦時活動」特集号であった。筆者のマツノは記事の中で、日本人女性の戦時態勢を4点にまとめている。

第1点は、息子を戦場に送り出す母親についてである。日本人の母親であれば、息子の無事な帰郷を願ったりしない。願うのは「勝利」のみ。それどころか、「立派に死んでください！」（ローマ字で書かれ、独訳付き）と言う母親もいる。なぜなら、靖国神社で戦死者の名が読み上げられ、後世にその名が刻まれることこそ、家族にとっての最大の名誉であるからだと説明している。

第2点は、女性団体の活動についてである。愛国婦人会、国防婦人会、大日本連合婦人会、東京連合婦人会、関西連合婦人会の名を挙げ、戦傷者の看護、戦死者の遺族の世話、戦場への慰問品の発送、兵士たちのための洗濯・繕い、遺族の職業訓練、就労女性の子どもの世話、保育園の開設、不要品の加工・販売による兵士の家族援助などの活動を報告し、「千人針」についても紹介している。

第3点は、召集された男性に代わって弾薬工場を始め、軍需工場あるいは農村で祖国のために働く日本人女性の姿についてである。（図9～12）そして最後に、労働奉仕より重要な戦時の精神的態度について触れている。夫や息子の戦死に際しては、女性たちは悲しみなど見せず、むしろ祖国と天皇のために犠牲を払えたことを誇りに思う、と伝えている。

この特集号の意図は、同盟国の女性たちの頑張りを伝えることで、ドイツ人女性の銃後の守りを強固にすることにあった。母親が出征する息子に向かって、「立派に死んで下さい」と言うかどうかは別として、ここに記述されている事柄は、独ソ戦開戦後の緊張した時期に、ドイツ人女性の間でもすでに実践されていたことであり、同盟国である日本（そして同時掲載されたイタリア）との連帯感は深まり、鼓舞されたことだろう。

図10「弾薬工場の日本人女性たち」

図9「ガスマスク製造に携わる日本人女性たち」

図11「茶摘みは専ら日本人女性によって行われる。お茶は日本の重要な輸出品」

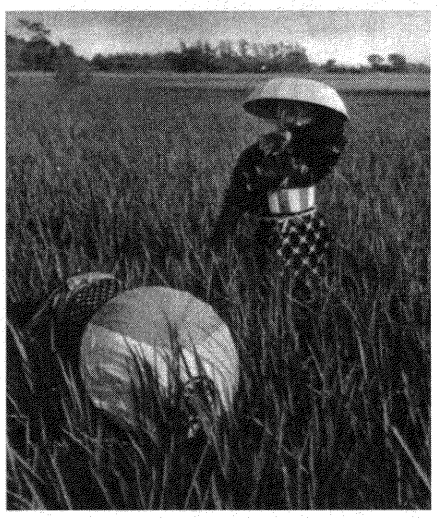


図12「稲の収穫。この仕事をするのは、ここでも女性だけ」ドイツでも、農業および農村援助は銃後の女性の最も重要な戦時活動だった。

（図9～12、第10年度1号（1941年7月））

同じ号に掲載された**「日本の家庭生活」**では、良妻賢母がテーマとなっている。日本でも「良妻賢母」が女性にとって、いかに大切な徳であるかを示し、ドイツ人女性にも求められた理想像としての「良妻賢母」を改めて意識させる目的があったと考えられる。しかし、筆致は決してプロパガンダ的ではなく、執筆者であるドイツ人女性は、日本独特の「家制度」の中で生きる日本人女性を客観的に描き出そうとしている。

すなわち、妻は夫の両親の世話をし、嫁として若い頃から、自分以外の家族が食事をし終わった後で、初めて食事を許されることを学ぶ。祖父が家長ではあるが、夫は老いた母親からも助言を受ける。しかし、自分も子どもを産めば、同じように生涯、名誉ある扱い

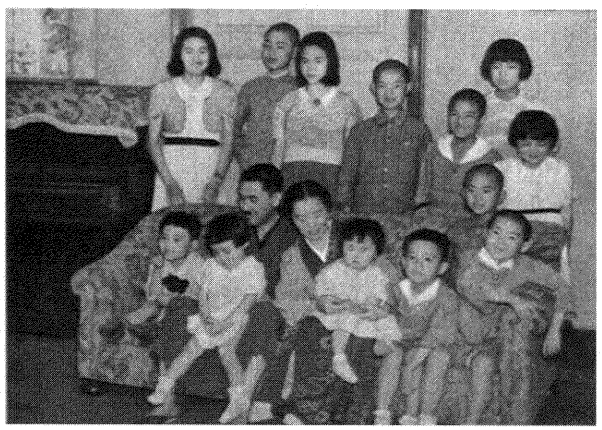
を受け、それは死後も続いてゆくと報告している。婚姻については、夫の選択は両親に任され、「お見合い」が行われる。女性の就労や西洋的価値観によって大きな変化が起こりつつあるが、個人ではなく、家意識が日本では今なお連綿と生き続けていると結論付けている。

また、結婚の幸せは、子だくさんであること。子どもたちは母親と、あるいは家族と一緒に、それも夜間でも外出し、映画館へも同行する。若い母親は、ひとに見られても平気で胸をはだけて子どもに乳を与えている、と日本の「子ども天国」を驚きの目で伝えている。全体として、好意的に描こうとしているものの、日本文化に見られる異質性に戸惑いを感じていることが伝わる記事である。

「戦時の日本人女性」（第10年度17号、1942年4月）は、銃後を守る日本人女性を称える記事となっている。日本は開国以来、戦争に継ぐ戦争を繰り広げる軍事国家であるが、今また自国の4倍の人口の中国と長期間にわたる戦争を戦っている。それを支えてきたのは日本人女性なのである、と強調する。日本ほど長期ではないにせよ、ドイツも1941年冬の戦局転換による対ソ連戦の長期化と、ソ連の大軍を迎え撃つという困難な状況の中で、日本人女性に負けない銃後の守りをドイツ人女性に要請することが目的だった。

記事には、日本人女性がいかに日常生活の贅沢を排して節約に努めているか、割烹着姿の国防婦人会がどのような活動を展開しているかが具体的に報告されている。記事の最後では、日本人女性は、たとえ夫が戦争のために何年も家を留守にしていても貞操を守っており、これが日本人兵士の精神的抵抗力の源になっていると力説する。シンガポール陥落も日本人女性の貞操の勝利であるなどと、書いている。このドイツ人男性記者は、当時問題化していた戦時の夫婦生活、とりわけ故国に残された妻の性の乱れが、前線の兵士たちの士気を低下させる原因となることを危惧しているのである。

＜記事「戦時の日本人女性」に添えられた写真より＞



「日本の子だくさん家族」
ナチ政権も経済的援助や名誉の授与によって出生率を上げる政策を打ち出した。「ドイツ母親名誉十字章」は最も有名な政策の一つで、子どもが4～5人の母親には銅、6～7人で銀、8人以上で金の十字章が授与された。しかし、1組の夫婦の子ども数は、1930年の2.2人が、1940年には1.8人に減少しており、ナチ政権の人口政策は実際には結果を出せなかったことになる。

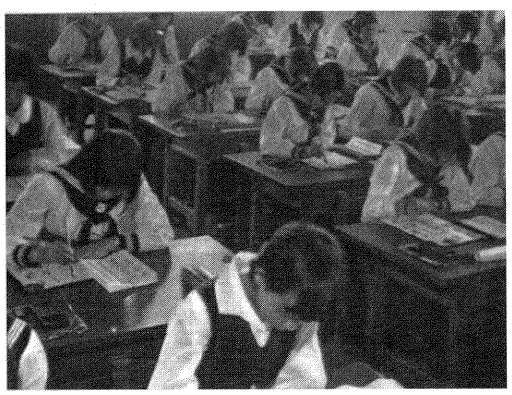
「日本でも母子は国家の特別な保護を受けている」
ナチ政権の母性主義的女性政策を逆手に取って、全国女性指導部の母親奉仕団は母性保護の様々な福祉政策を実行に移した。過重な労働から母親を保護するドイツの「就労する母親保護法」(1942年5月)は、当時世界で最も進歩的な母性保護法であった。

「子どものしつけ」(第11年度6号、1942年10月)は、西洋の価値観に触れていったんは就労するものの、結婚すると家庭に入り、夫と子どもに尽くすようになる日本女性の生き方を紹介し、とりわけ家庭において女性が引き受ける子どものしつけについて詳述している。

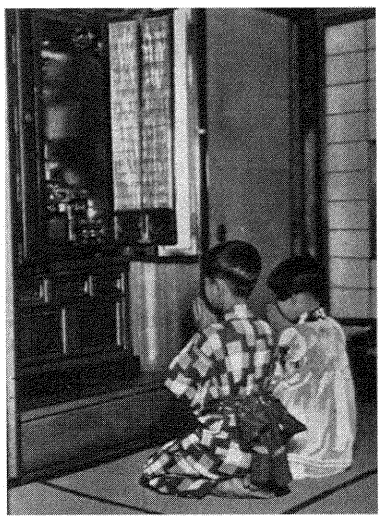
電車に乗ると、至る所で子どもに席を譲る光景が見られ、神社や寺院では子どもたちが自由に遊び回る日本の「子ども天国」も、就学年齢に達すると、事情が変わる。少年は制服を着用し、先生に礼儀正しく挨拶し、従順と勤勉を身につける。学校のことは教師に任せるにしても、両親に対する従順、誠実、兄弟愛、友情、先生に対する敬意などの心を育むのは母親の仕事である。

娘の誕生は喜ばれず、娘しかいない場合は、婿養子を取って息子とする。息子でなければ、お国のための犠牲死を果たせないからという理由が付けられている。結婚の準備のために娘に生け花や茶道を教授するのも母親の務めである。男女別の教育目標、「従順」や「誠実」といった徳育重視の日独共通項を確認している。

<記事「子どものしつけ」に添えられた写真より>



「授業風景」



「仏壇の前で」

「子どものしつけ」の記事に、日本から贈られた絵についての文章が添えられている。日本を理解してほしいとの願いから、7～16歳の日本の生徒が描いた20万点の絵が、ドイツとイタリアに恵贈された。ナチ教員連盟が優秀作品を選んで、近々展覧会を開催するという予告記事である。日本の習慣を描きながらも戦争の時代を反映する絵（図13）、戦時の国際政治を的確に捉えた絵（図14）、富士山（図15）やお寺（図16）を描いて、日本文化の一端を伝える絵が一例として掲載されている。

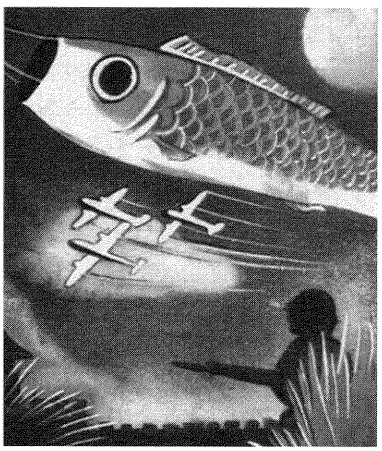


図13（左）「端午の節句には大きな紙製の鯉を柱に結びつけて祝う。躍進する力のシンボルの鯉に、日本軍への思いが重ねられている」
図14（右）「日本の青少年は、三国同盟をこんな風に見ている。同盟国は力強い手で、新しい世界秩序に向けてハンドルを切る。ハンドルには『平和をめざして』とある」

図15（左）「日本の聖なる山、富士山は千年来、日本の芸術家の心を捕らえてきた。風景画の最高傑作は、雪を頂く火山の様々な姿を描いている」
図16（右）「寺院の聖なる門」

（図13～16、第11年度6号（1942年10月））

『ナチ女性展望』に掲載された日本に関する最後の記事は、**「日本の国民劇の改作『忠誠』初演」**（第12年度8号、1944年4月）である。この国民劇とは、二代目竹田出雲（1691年～1756年）の『仮名手本忠臣蔵』である。ミュンヘン、バイエルン国立劇場

で上演され、初演には在独日本大使、大島浩、在独日本公使、財務大臣シュヴァルツ、大管区長パウル・ギースラーのほか、党や国防軍から何人も要人が出席し、儀式的色合いを帯びたという。この記事の執筆者は、記事の最後に「(日本とドイツの間には) 兵士たちの揺るぎない態度、大々的戦功、友情など一貫した賛美に値する共通性があるにもかかわらず、知日ドイツ人にとっても、日本の考え方、行動、信仰、伝統は謎の部分が多い」という感想を述べている。

クルト・ランゲンベック演出『忠誠』、1944年

敗戦色が濃くなった時期に、国家への忠誠を訴える手段として、忠義を題材とする同盟国、日本の戯曲を上演したのだろうが、「仇討ち」を始めとする日本の精神文化に強い違和感を受けたことが窺える。ポジティヴな日本像を作ろうとしながらも、これが本音だったのだろう。

おわりに

日本の伝統文化が女性の着る着物に象徴されていることは、戦前・戦中を通して一貫していた。それは、伝統の継承は女性の役割であるという、ドイツでも一般に受け入れられていた理解と重なる。

その一方で、初めて日本について伝える戦前の記事では、急速に近代化、欧米化する日本を客観的に描いている。記事に添えられた写真に写る洋装の男性は近代化を表象し、着物姿の女性を指導するという構図の中には、当時のジェンダー秩序が表現されている。また、近代化を目指す日本の失業問題や就労女性の増加という、ドイツと共通する問題も取り上げ、両国が同じような状況にあることを示唆している。

日本人女性を描く際の、このドイツ人女性記者の特徴は、日本人女性を同性として徹底して自分と同じ目線で見ようとしていることである。当時、ヨーロッパで抱かれていた日本人女性のイメージは、「権利をもたず」に「抑圧され」、「華奢」で「か弱い」存在というものだったが、彼女は着物姿の「芸者」に洋装の「現代女性」を並べて、日本にも実際にはスポーツをし、職業を持って社会進出する「新しい女性」たちがいることを示して、偏見からの解放を訴えた。

こうした日本人女性に対する偏見からの解放の主張は、国民社会主義の保守的な女性理解にもかかわらず、またそれ故に外国の偏見に晒されているドイツ人女性が、実際には民

族共同体建設に男性と同じく社会的にも経済的にも貢献しているとの自負に通じる。ナチ指導部は、相変わらず保守的建前を堅持してはいたが、この記事が書かれた1936年後半には、現実的には女性の社会進出を当てにせざるを得ない矛盾した状況に陥っていたのである。

戦時下の記事では、マツノ・シゲコの記事「日本人女性の戦時動員」とドイツ人男性記者による「戦時の日本人女性」にプロパガンダ的色合いが濃厚であった。日本人女性の良妻賢母の考え方、女性団体の戦時活動、女性たちの労働奉仕、日常生活における節約の努力、戦時における揺るぎない精神的態度などを報告しつつ、実は読者であるドイツ人女性に銃後を守る際の手本を示し、良い意味でのライバル意識をかき立て、鼓舞することが意図されていた。

とはいえ、戦中の記事でもドイツ人女性が執筆した「日本の家庭生活」や「子どものしつけ」には、扇動的な要素はほとんどなく、むしろ夫やその両親、息子や娘との関係を中心に据えて、日本人女性の家庭生活を詳細に伝えている。中でも、個人としてではなく、「家制度」の中で生きる日本人女性の姿や、ドイツでは考えられない日本の「子ども天国」に大きな文化的差異を感じていることが窺える。

註

(1) シンポジウム「第二次世界大戦とニッポン ―表象・ジェンダー・エスニシティ―」。プレ企画：池川玲子「戦時下映画に見る女優像：原節子と高峰秀子」、第1部：平塚博子（東日本大震災のため欠席）、杉村使乃、松本ますみ、桑原ヒサ子「第二次世界大戦下、世界のメディアが見たニッポン ―アメリカ・イギリス・中国・ドイツ―」、第2部：加納実紀代「『大東亜共栄圏』とジェンダー」。主催：敬和学園大学「戦争とジェンダー表象研究会」、日時：2011年3月19日(土) 10:00～16:30、会場：新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」。

(2)『ナチ女性展望』の出版部数は、1934年2月に25万部、数ヶ月後の6月には50万部に伸び、1939年には140万部に達している。部数で第2位の『主婦の雑誌』が57万5千部であったから、『ナチ女性展望』は断然トップだった。しかし市場を独占することはついにできなかった。2大出版社である、ドイツ出版社（旧ウルシュタイン出版社）とユニヴァーサル出版社の出版する多種多様な女性雑誌の合計部数は1938年末に230万部を数えていた。ただし、各誌の発行部数は平均5万部程度であった。

(3)『ナチ女性展望』解題、および全目次については、桑原ヒサ子「資料『ナチ女性展望』全目次」、上野千鶴子、加納実紀代、神田より子、桑原ヒサ子、松崎洋子『軍事主義とジェンダー 第二次世界大戦期と現在』インパクト出版会、2008年、i～xlv頁。

(4) ショルツ＝クリンクがナチ女性指導者に就任するまでの女性リーダーたちの権力闘争については、桑原ヒサ子「『ナチ女性展望』*NS Frauen Warte* とその表紙にみるジェンダー」『敬和学園大学研究紀要』第17号、2008年、199～216頁、およびクローディア・クーンズ『父の国の母たち』(上) 時事通信社、1990年、「第3章 ナチ女性と『自由運動』」、「第4章 解放と大恐慌」、「第5章 新国家の『古顔たち』」に詳しい。

(5) 全国女性指導者ゲルトルート・ショルツ＝クリンクと全国女性指導部については、桑原ヒサ子「ナチ女性の社会活動における戦略としての母性 ―ナチ・イデオロギーと女性の地位向上のはざまで―」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』No.9、2011年、37～70頁参照。

(6) 雑誌の号数の付け方が特殊なので、簡単に説明しておこう。創刊号が発刊された1932年7月から翌年6月までの一年間を、「初年度」と呼んでいる。したがって、廃刊になった1944/45年号は「第13年度」になる。また、各年度1号は7月になるが、空爆の影響で第11年度から第12年度にかけて発行ペースに乱れが生じている。発行頻度は、記載がない期間もあるが、大抵は表紙に明記されている。「14日に1冊」の割合で発行され始め、第8年度18号（1940年3月第2号）から「月2冊」、第10年度16号（1942年3月）から「3週間に1冊」、第11年度15号（1943年5月）から「月1冊」となる。そのため、同じ月に2号ないしは3号発行される場合がある。

(7) 桑原、註（5）、56～57頁参照。

(8) 同上、63～64頁参照。